

ティーチングポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

理学療法学コース 講師 源 裕介

1. 教育の責任

近年、少子化の影響から学生の数も減少傾向にあり、加えて入学する学生の学力低下も懸念されている。そのため、10年前と同等の教育の提供では、学生が講義内容について来られないという現象が発生している。このような状況のため、今までと同様の教育の提供では通用せず、同等レベルの知識をよりわかりやすく提供することが教員に求められていると感じる。現状の教員としての責務は、上記現状を打破すべく、常に授業に創意工夫をしていくことであると考えている。

私は健康科学部の理学療法学科の教員として、リハビリテーション学科理学療法学コースの専門科目を中心に担当している。2024年度後期の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、運動器系及びスポーツ系領域に関する理学療法の専門科目となっている。そのほか、理学療法全般の演習、実習科目および運動学などの基礎科目を担当している。

2024年度後期

科目名	時期		受講者
運動器系理学療法評価学演習	2年後期	必修	59名
基礎演習II	1年後期	必修	106名
理学療法演習I-2	1年後期	必修	47名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 整形外科リハビリテーション学会 評議員
- 2) 日本陸上競技連盟医事委員会トレーナー部
- 3) 山梨県陸上競技協会トレーナー
- 4) 附属図書館運営・紀要編集委員会
- 5) 研究・動物実験委員会

1)の活動においては、普段の運動器に関する授業の情報の基盤となっており、学会から仕入れた多くの情報を授業内で提供している。

2,3)の活動においては、本学の理学療法学コースで力を入れている「スポーツの理学療法」の分野をより活性化させる活動の1つとなっている。特に山梨県内での活動を多く実施し、本学の宣伝とともに地域貢献活動としての位置付けともなっている。

4-5)に関しては、学生に情報収集や学生・教員の研究をサポートする活動が主で、大学の基盤である「研究」に貢献している。

2. 教育の理念・目的

本学は、複雑化する社会のニーズに応え、多様な課題に果敢に挑戦できる「問題解決能力を備えた人材」を育成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識と技術力」、そして「開かれた共創力」という三つの教育目標を掲げている。理学療法教育においては、単なる知識・技術の習得にとどまらず、患者さんや多職種と深く連携し、自ら進んで行動を起こせる人材を育むことを教育の根幹に据えている。

1) 自律的に思考し、社会に貢献できる理学療法士の養成

現代の医療現場では、状況を的確に判断し、自発的に行動する能力に加え、他職種との円滑な連携を通じてチーム医療を推進する力が不可欠である。自律性を発揮するには、目の前の問題を特定し、個別の課題を明確化する上で、主体的にイニシアチブを取ることが求められる。学生は、教員から提供される情報を鵜呑みにするだけでなく、多岐にわたる学問分野間の関連性を深く探求し、自身の専門性が貢献できる領域を見出し、対象となる人々の抱える課題を多角的に捉える視点を養う必要がある。本学では、問題解決型の学習指導を重視し、学生一人ひとりの成長段階に合わせて課題の難易度を調整することで、自ら考え、解決策を導き出す能力を最大限に引き出す教育を展開している。

2) 理学療法の本質を深く、そして分かりやすく伝える

豊かな人間性を育み、理学療法士としての専門知識と卓越したスキルを最大限に発揮し、人々のQOL（生活の質）向上に貢献できる人材の育成を目指す。高校教育では触れることの少ない解剖学や生理学といった基礎医学の深淵な知識を伝えるだけでなく、実践的な評価技術や治療介入スキルを具体的に提示することで、臨床現場で即戦力となる知識・技術へと昇華させるプロセスを重視している。

我々は、長年の臨床経験で培った知識と技術を、学生が直感的に理解できるよう、明確かつ体系的なカリキュラムとして構築している。現代の理学療法教育では、SNSや動画コンテンツといった多様な情報伝達ツールが利用可能である。これらのツールを効果的に活用し、学生の学習スタイルやライフスタイルに合わせた最適な学習方法を常に模索することが重要だと考えている。単に講義スライドをなぞるだけの受動的な学習ではなく、体験を通じて深く学び、応用力を養う、より能動的な学習体験を追求していく。

3. 教育の方法

学生が成長できる教育の機会は、学内での授業や課外活動に加えて、学外での多様な体験活動を通して提供される。我々は、学生が授業の開始時と終了時に適切な挨拶を交わすなど、社会人としての基本的なマナーを身につけ、清潔な身だしなみを保つよう指導して

いる。さらに、学生がクラブ活動やサークル活動へ積極的に参加することを奨励し、そこで培われる人間関係におけるコミュニケーションの重要性を、教育における不可欠な要素として深く認識させることに注力している。

・実践に基づいた授業展開

我々の教育では、理学療法という専門性の高い分野の特性上、現場に直結する実践的な指導がカリキュラムの大部分を占めている。例えば、運動器系の理学療法評価に関する演習や実習科目では、教科書で得た知識を単に伝えるだけでなく、教員が実際に経験した豊富な臨床経験に基づいて、より分かりやすく解説している。

具体的には、実際の臨床事例の情報を基に、教科書の内容と照らし合わせながら「どのような点に重点を置いて観察すべきか」「臨床現場で必須となる手技や考え方」といった、即戦力となる能力が確実に身につくような授業を展開している。実技指導においても、機能解剖学や運動学といった基礎に忠実な運動療法を紹介し、学生が自身で確実に結果を出せるようになるまで、丁寧な技術指導を行っている。

・復習プリントのポートフォリオとしての活用

私の授業では、単なる試験対策に留まらない学習効果の最大化を目指し、「復習プリント」を「ポートフォリオ」として活用する独自の取り組みを推進している。

この復習プリントは、学生が日々の授業で得た知識を整理し、理解度を確認するためのツールである。しかし、その真価は、単に答えを埋めるだけにとどまらず、学生は解けなかった問題や理解が曖昧な箇所を繰り返し見直し、自らの成長の軌跡を記録していくことで、このプリントを「学びのポートフォリオ」として機能させる。

具体的には、

- ・初期の理解度と、その後の学習による深化を可視化する。
- ・苦手分野の特定と、それに対する克服のプロセスを明確にする。
- ・試行錯誤の過程や、新たな発見を記録し、自己学習の習慣を育成する。

このポートフォリオとしての活用は、学生が自身の学習状況を客観的に把握し、自律的な学習者へと成長するための重要なツールとなる。私は、このポートフォリオを通して学生の学習状況を把握し、個々の学生に合わせたきめ細やかな指導に繋げている。

4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートを活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことができる。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析を行い、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

・運動器系理学療法評価学演習

この授業では臨床上でよく使われる理学療法評価法を紹介し、それを実際に実技として体験していく流れとなっている。授業の創意工夫点としては、まず実施する評価方法の説明を、端的にポイントをまとめて短く説明する。実技は各々実施するのではなく、教室前で行うデモと同時進行で行う。この方法のメリットとしては、長い説明では集中力を切らし逆に理解していただけないので、要点を絞って端的にわかりやすく伝えた方が伝わりやすいという部分にある。また、実技を全員同時進行で行うことで、実技をせずにサボってしまう学生を防止し、同調性を利用して全員が実技に取り組むようにしている。本来なら主体的に動いて実技をするのが理想だが、まずは揃って同じ基礎をしっかりと体験することがまずは先決のため、この方法を選択した。また、実施した評価結果を記録していくことで自らの達成度を可視化し「これだけの評価を体験することができた」という自覚をさせるよう努めた。これらの取り組みにより、授業評価に関しては比較的良い評価をいただき、今後もこれが継続できるよう努めていきたいと考えている。

5. 今後の目標

今後の理学療法教育目標

現代社会は急速に変化しており、理学療法士に求められる能力も常に進化している。このような時代の変化に即応するため、私は以下の教育目標を掲げ、理学療法教育の質の向上に努める。

短期目標：

1. カリキュラムと指導法の継続的なブラッシュアップ

最新の医療技術や研究成果、そして社会のニーズに合わせて、カリキュラム内容を常にブラッシュアップする。これは、単に新しい知識を追加するだけでなく、既存の教育方法を見直し、学生がより効果的に学習できるような指導法の開発も含む。定期的な研修や国内外の学会参加を通じて、教員自身の専門知識と教育スキルも高め、質の高い教育を提供し続ける。

2. 学習成果と成長プロセスの可視化

学生の学習成果だけでなく、その学びのプロセスや成長を可視化する仕組みを導入する。ポートフォリオの活用や、定期的な個別面談、スキル評価などを通じて、学生自身が自分の強みや課題を客観的に把握できるよう支援する。また、教員側も学生一人ひとりの進捗状況をリアルタイムで把握し、個に応じたきめ細やかな指導に繋げ、より効果的な学習支援を実現する。

長期目標：

学生の主体性を育む教育の推進

学生が自ら課題を見つけ、解決策を探求する主体性を育む教育を推進する。一方的な知識伝達に留まらず、グループワークやPBL（問題解決型学習）、クリニカルリーズニングを重

視した演習などを積極的に取り入れる。これにより、学生は自らの思考プロセスを深め、能動的に学びに取り組む姿勢を養い、卒業後も自律的に学習し続けられる理学療法士を目指す。

これらの目標を通じて、我々は時代の変化に対応できる、主体性と実践力を兼ね備えた理学療法士を育成し、医療・保健・福祉の発展に貢献していく。